英国上院の招待による同国公式訪問及び各国の政治経済事情等視察
参議院議院運営委員長一行報告書

団　　長	参議院議院運営委員長	
		末松　信介
	参議院議員	足立　敏之
	同	大家　敏志
	同	馬場　成志
	同	斎藤　嘉隆
	同	白　　眞勲
	同	里見　隆治
	同	櫻井　　充
	同	田村　智子
同　　行	委員部議院運営課長	
		北脇　達也
	委員部議院運営課調整主幹	上村　隆行
	参事	綿村　　恵

一、始めに

本議員団は、英国上院の招待により同国を公式訪問するとともに、各国の政治経済事情等を視察するため、令和元年九月二日から十一日までの十日間、英国及びポルトガル共和国の二か国を訪問した。なお、当初は十日に帰国予定であったが、台風第十五号の影響により予定の復路便が欠航となり、急きょフランクフルトに移動し、帰国した。

日程は次のとおりである。

九月　二日　東京発ロンドン着（三泊）

三日　上院訪問

トレンチャード英日議員連盟副会長・上院議員等との会談

日系企業関係者との意見交換

四日　ミカエル・アドルフソン・ケンブリッジ大学教授等との会談

英日議員連盟・在英国日本国大使館共催ラグビーワールドカップ直前レセプション参加

五日　オリンピックパーク視察

ロジャー・ゴッシフ英日議員連盟会長・下院議員等との会談

ジャパン・ハウス視察

ロンドン発リスボン着（四泊）

六日　ルイス・カストロ・エンリケス投資貿易振興庁長官との会談

ＹＫＫポルトガル社視察
七日　リスボン日本語補習授業校視察
在留邦人との意見交換
八日　コインブラ大学視察
クリスティーナ・カステル・ブランコ・リスボン大学農業経営学研究所教授・造園設計士との会談
九日　葡日友好議員連盟議員団との会談
ドゥアルテ・コルデイロ首相担当兼国会担当副大臣との会談
リスボン発フランクフルト着
ミュンヘン発フランクフルト着（一泊）
十日　フランクフルト発（機中泊）
十一日　東京着

二、英国

（一）トレンチャード英日議員連盟副会長・上院議員等との会談

議員団は、トレンチャード英日議連副会長・上院議員のほか、ハウエル上院議員、ランズレー上院議員（いずれも与党、保守党）と議会内で会談した。

冒頭、トレンチャード副会長から、議員団の訪問に対し歓迎の意が示された。また英国がＥＵから離脱する、いわゆるブレグジット問題をめぐり議会周辺でデモが生じるなど騒然とした中でお迎えしたことに対し、おわびの言葉があるとともに、英日関係についてこの上ない良好な関係を築きたいとの挨拶があった。

末松委員長から、同副会長は日本での勤務経験があり、日本証券業協会理事としても活躍されたこと、また長年にわたり日英の議員交流に寄与するなどして二〇一四年に旭日重光章を受章されたことに対して敬意を表し、議会の再開日にこうした会談の場を設けてもらったことに感謝の意を示した上で、ブレグジット問題の現状等について有意義な意見交換を行いたいとの挨拶があった。

末松委員長の発言を受けて、同副会長から、まずはブレグジットに伴うフレームワークを下院で議論することになるが、重要な点は上院がどのような態度で臨むのかであり、個人的には「英国がＥＵとの間で協定の合意なくＥＵを離脱すること（以下、「ノーディール」という。）」は回避すべきであるとの発言があった。

そのほか、英国議会における議案審議の流れ、バリアフリーの対応状況、女性議員の比率、欧州議会との関係などについて質疑が行われた。

なお、会談に先立ち、同副会長等の案内により、議場等の上院施設を視察するとともに、会談後には、開会中の上院本会議を傍聴した。

（二）ミカエル・アドルフソン・ケンブリッジ大学教授等との会談

議員団は、ロンドンから約百キロメートル離れたケンブリッジ大学を訪問し

た。冒頭、アドルフソン教授・日本学科長及び同席の橋本清美堂島酒醸造所最高経営責任者から、歓迎の意が示された。また、同教授から、日本と他国の優秀な研究者が一堂に会して研究ができないかとの問題意識の下、ケンブリッジを拠点としたグローバル研究センター「センターオブジャパン」を創設したい。日本や世界の問題を解決する場所として、研究者のほか政府、企業も参加の上、研究成果を世界に発信したいとの説明があった。

議員団から、同センターで共同開発し、世界標準を取るなど戦略的な場所として活用したら面白い。ただし、日本では研究論文数の減少など研究力の低下が指摘され、また大学予算も減少傾向にあるなど資金面の問題も抱えているとの発言に対し、同教授から、日本の研究力は落ちているが、同大学は人材も豊富で世界的にも有名であるので、ここを拠点としてほしいとの発言があった。

また、議員団から、日本の強みは何かとの質問に対し、同教授から、エネルギー、自動車関係は世界トップレベルであり、総じて日本の製品は実用性が高いとの発言があるとともに、橋本最高経営責任者から、英国はデザイン重視であるが、日本のものづくりは使う側に立った設計で世界に誇れるものであるとの発言があった。

加えて、議員団から、ロンドン大学の東洋アフリカ研究学院（通称ソアス）がアジア・日本文化の研究を行っていたが、同国での他の研究拠点はいかがかとの質問に対し、同教授から、例えばカーディフ大学で日本学科をリスタートしようとしたが、不調に終わった。既存のものと似たようなものではなく、もっと大きな観点で構想を練る必要があるとの回答があった。

（三）英日議員連盟・在英国日本国大使館共催ラグビーワールドカップ直前レセプション参加

英日議連のスポーツ小委員会と日本国大使館の共催により、英国議会からラグビーワールドカップ大会への注目を更に集めることを目的として、本年九月から始まる同大会の開催を記念するレセプションが議会の議員会館内で行われ、本議員団も参加した。

同レセプションでは、同小委員会共同座長であるマコーネル上院議員を始め、イングランドほか三地域の各ラグビー協会ＣＥＯ等、日英二十一世紀委員会日本側座長の塩崎恭久衆議院議員などから挨拶があった。

また、同レセプションには英日議連及びラグビー議連所属の議員、政府、企業、スポーツ関係者などが招待され、両国が一体となって同大会を盛り上げようとする熱意とともに、イングランドはラグビーの発祥の地でかつ前大会の開催地でもあることから、その関心の高さを伺い知ることができた。

（四）オリンピックパーク視察

オリンピックパークはロンドン東部ストラットフォードに所在し、二〇一二年

ロンドンオリンピック・パラリンピック競技大会の選手村、メインスタジアム、メディアセンター等が集約して建設された施設である。同大会終了後に再整備され、一大観光地になっている。なお、旧選手村として使用されていた建物群は、住居に転換されている。

来夏に東京で同大会が控える中、大会後どのように土地や施設を活用しているのかなどについて、ロンドン・レガシー開発公社のコリン・ナイッシュ専務より説明を受けながら、主要施設を視察したのは大変有意義であった。

議員団から、同パークのある地域は元々どのような用地であったのかとの質問に対し、同専務から、廃棄物処理施設が立ち並ぶ場所であったが、再開発の観点からもロンドン東部地区に大きな恩恵をもたらすことになったとの回答があった。

また、議員団から、オリンピックスタジアムの使用状況についての質問に対し、同専務から、仮設エリアを撤去し規模を縮小の上、陸上、サッカー、野球など様々な競技会場として活用しているとの回答があった。

加えて、議員団から、旧選手村を改築した住宅の戸数と家賃の相場についての質問に対し、同専務から、市営住宅として中・低所得者を中心に三万世帯の入居を見込むとともに、家賃はロンドン中心部の五〇％程度であるとの回答があった。

（五）ロジャー・ゴッシフ英日議員連盟会長・下院議員等との会談

議員団は、ゴッシフ英日議連会長・下院議員（野党、労働党）のほか、ポール・ファレリー副会長・下院議員（野党、労働党）、シェリル・ギラン下院議員（与党、保守党）、ジョン・グローガン下院議員（野党、労働党）と議会内で会談した。

冒頭、末松委員長から、ゴッシフ会長が二十年にわたり英日議連会長を務め、二〇一四年に旭日重光章を受章されたことに対して敬意を示すとともに、本日は議会が慌ただしい中での訪問となったが、その議論の的であるブレグジット問題も含め、意見交換を行いたいとの挨拶があった。

ゴッシフ会長から、議員団の訪問に対し歓迎の意が示された。英国ではジョンソン首相が本年十月三十一日までにＥＵから離脱することを明らかにする中、昨日、ノーディール反対法案が下院で通過する一方、首相が提出した十月十五日に総選挙を求める動議は三分の二以上の賛同が得られず、成立しなかった。私見ではあるが、労働党のコービン党首は、ノーディール反対法案が成立すれば総選挙に賛成するのではないかとの挨拶があった。

ファレリー副会長から、同じ労働党のゴッシフ会長と異なり、ノーディール反対法案が成立した場合、首相はこれに拘束されないのではないかとの見方、また十月三十一日までの離脱を強く主張しているため、首相は政治的に難しい立場に置かれるとの見方から、労働党は総選挙に反対すると考えるとの発言があった。

ギラン議員から、政府与党内には上院でノーディール反対法案に反対や修正議決を行う懸念があり、成立は不透明である。また二十一名の保守党議員が離党し

たので総選挙の実施は容易なことではない。こうした複雑な要素がある中、全てのプロセスを会期内に行う必要があるが、日程的に困難であるとの発言があった。

議員団から、合意なき離脱の「合意」の内容についての質問があり、ゴッシフ会長から、英国首相とＥＵ二十七か国の代表団との間で関税や通関制度などについての合意を示すとともに、メイ前首相とＥＵの間でも一定の合意をもたらしたが、英国議会ではそうした協定案を三度否決した経緯があるとの発言があった。

また、議員団から、ジョンソン首相はなぜ強行しようとするのかとの質問に対し、ギラン議員から、過去にメイ前首相が労働党との調整に失敗したことに鑑み、ジョンソン首相は別のリーダー像を模索している。ただし、根本的な問題として議会内はＥＵ残留派が多い一方、国民は離脱派が主流であるとの発言があった。

加えて、議員団から、ＥＵ加盟後に生活水準が低下したなど国民がＥＵ離脱を支持する理由についての質問に対し、ファレリー副会長から、ＥＵ加盟後にポーランドから百万人ほどの移民を受け入れるなどの移民問題も影響している。これに伴い、国民は自国へのアイデンティティが希薄となり、また移民の流入が雇用を圧迫していると感じ、国民投票につながったとの見方もあるとの発言があった。

末松委員長から、僅差で離脱派が勝利した国民投票は国民を幸せにしたのかとの質問に対し、ゴッシフ会長から、ＥＵが目指すものは、独立国家の連合体ではなく、米国のような合衆国の形態であるが、これが英国には合わなかった。またＥＵへの加盟の際、その目的や概念を国民に十分説明しなかったため、不満や怒りが噴出し、国民投票につながったが、この選択肢は正しくなかったとの発言があった。また、ギラン議員から、ゴッシフ会長と同意見であり、二大政党制の中で政治的ゲームを繰り広げた結果、国民に対して悪影響を及ぼしたとの発言があった。

（六）ジャパン・ハウス視察

ジャパン・ハウスは、戦略的対外発信の強化に向けた取組の一環として、外務省が世界三都市に設置した対外発信拠点であり、ロンドンは、サンパウロ、ロサンゼルスに続き、二〇一八年六月に開設された。同施設は、商業的・文化的要素を兼ね備えた、多目的スペース、ショップ、レストラン等の機能を有し、日本への深い理解と共感の裾野を英国内外に広げることが期待されている。

マイケル・フーリハン館長から、来館者数は六十万人を超え、その中でも特に十五歳から三十四歳の層が多いが、これは若年層をターゲットに情報を発信している成果であるなどの説明があった。

三、ポルトガル共和国

（一）ルイス・カストロ・エンリケス投資貿易振興庁長官との会談

議員団は、リスボン市内のポルトガル投資貿易振興庁を訪問した。冒頭、エンリケス長官から、議員団の訪問に対し歓迎の意が示されるとともに、同投資貿易

振興庁は、両国の経済関係の強化に努めてきた。こうした努力に加え、構造改革により経済が好転したことから、二〇一五年以降日本から同国への投資は増加基調にあり、両国の経済関係は更に発展するとの挨拶があった。

末松委員長から、同長官は毎年訪日されるなどして、日本との経済関係の強化に尽力されたことに対して敬意を示すとともに、同国との関係では、一五四三年の種子島での鉄砲伝来が歴史上大きな出来事である。本日は、経済関係の更なる強化のため有意義な意見交換を行いたいとの挨拶があった。

次いで、同長官から、ポルトガルの経済情勢を説明の上、日本企業の対ポルトガル直接投資、自国製品の対日輸出の拡大などについて要望が示された。

同長官の要望を受けて、末松委員長から、同国に進出している日本企業は二〇一九年七月時点で八十四社であるとともに、二〇一八年ベースの貿易収支は日本の大幅な黒字であり、その解消策として、例えば日欧ＥＰＡの発効に伴いワインの関税が撤廃されたのでこれを日本に売り込むべきではないかとの発言があった。

末松委員長の発言を受けて、同長官から、同国のワイン産業は、数千という家族経営の零細企業で成り立っており、そのため海外市場に大量のワインを十分に供給できないが、グリーンワインなど良質なワインがあるので、供給体制を整備し、日本に一層輸出できるよう努力したいとの発言があった。

議員団より、どのような企業に進出してほしいのか、また同国に進出する利点は何かとの質問に対し、同長官から、同国と結び付きのある南米やアフリカ諸国に目を向け、ビジネス展開を考える輸出型企業が望ましい。また、同国には世界的視野と行動力を持つ人材が豊富にいること、また若年層が二か国以上の外国語を話せることも、そうした企業にとって魅力に感じるのではないかとの回答があった。

（二）ＹＫＫポルトガル社視察

議員団は、リスボン市郊外のカレガド市にあるＹＫＫポルトガル社を訪問した。冒頭、大家理事から、ポルトガルに八十社程度の日本企業が進出している中で同社はトップランナー的な存在であることに対して敬意を示すとともに、同国に進出後、何が達成できたのかなどを中心に説明を伺いたいとの挨拶があった。

中畝智也ＹＫＫポルトガル社社長から、同国では一九八一年よりファスナーの輸入・販売を始め、翌八二年に製造工場を設置し、現在では臨時従業員も含め百七人の規模となる中、欧州で一、二位を争う営業利益を上げているなどの説明があった。

議員団から、同国に進出し、得られたメリットについての質問があり、同社長より、日本から輸入、再販を行うと納期に間に合わない状況が生じるので、これに対応する必要があり、欧州では同国は車両向け、フランスは高級ブランド向けの製品など市場の特徴を踏まえ、すみ分けて生産しているとの回答があった。

そのほか、同国においてリフォームやエコ住宅などの事業を展開する可能性、

低価格の中国製に対抗する経営戦略、社員育成策などについて質疑が行われた。
なお、同社の工場内にあるスライドファスナーの製造工程等を視察した。

（三）リスボン日本語補習授業校視察

一九七三年に設立された同校は、平日に現地校やインターナショナルスクールに通う在留邦人子女に対し、公立高等学校の一部を借用し、週一回、国語や算数など日本の義務教育課程に準拠した補習教育や日本の学校行事を行っている。

平成三十一年四月現在、児童数は小学部二十三名、中学部五名の計二十八名であるのに対し、教員数は六名である。そのうち児童について、川合毅昌同校運営委員長から、設立当初は赴任者の子女が大半であったが、現在は長期滞在あるいは永住する家庭の子女が多く在校しているなどの説明があった。

授業を視察したが、日本の教材を活用し工夫を凝らした授業を行っているとの印象を受けた。なお、同校の要望を踏まえ、日本の歴史年表、地図帳等を寄贈した。

（四）コインブラ大学視察

コインブラ大学は、リスボン市から北に約二百キロメートル離れたコインブラ市内にある十三世紀に設立されたポルトガル最古の大学で、現在、文学、法学、医学など八学部を擁し、二万人超の学生が学んでいるとともに、本大学建造物群は二〇一三年に世界遺産として登録されている。

同大学施設の視察に先立ち、ルイ・デ・フィゲイレド・マルコス法学部長から、同大学は毎年千六百人以上の留学生を迎え入れているが、その中には日本人の学生も多く、十六世紀には天正遣欧少年使節の訪問を受けるとともに、十七世紀の初頭には日本語・ポルトガル語の辞書を作成するなど日本との関係も強い。これを契機として更なる関係強化につながれば光栄であるとの挨拶があった。

（五）クリスティーナ・カステル・ブランコ・リスボン大学農業経営学研究所教授・造園設計士との会談

議員団は、コインブラ市内のキンタダスラグリマスホテルを訪問した。冒頭、馬場理事から、今般の会談場所である同ホテルに日本庭園を設計されたこと、またイエズス会のルイス・フロイスの研究を通じ日本とポルトガルの関係をつないだことに対して敬意を表したいとの挨拶を行った。

カステル・ブランコ教授から、議員団のコインブラへの訪問に対し歓迎の意が示されるとともに、一五四三年の鉄砲伝来以降、約五百年が経過したが、日本語の中にボタン、パン、テンプラ等のポルトガル語が使用されているなど、日本とポルトガルは良好な関係を築いてきたとの挨拶があった。

議員団より、フロイスの研究を行うことになった動機についての質問に対し、同教授から、十六世紀に全く知らない民族に銃を渡すという行為は他国との間で

例はなく、厚い信頼関係を表すものであり、これに感銘を受け、両国のポジティブな関係を紹介したかったとの回答があった。

また、議員団より、庭園の維持・管理には理系的な造園学だけではなく、文系的なマネージメントの知識も必要と考えるがいかがかとの発言があった。

これを受けて、同教授から、同意見である。なお、二〇一一年の日本滞在時に東日本大震災を経験した。その際、建物が大きく揺れ動くが地震では倒れない設計に感動する一方、津波には無力であるとの印象を受けた。津波対策としては環境工学や自然科学の考え方も必要ではないかとの発言があった。

これを受けて、議員団から、例えば宮城県の松島では点在する島が津波をブロックし、緩衝作用をもたらした。また震災後、同県岩沼市に造成された人工的な丘「千年希望の丘」は避難場所としての機能のほか、津波を和らげる効果を持つので、訪日の際には案内させてほしいとの発言があった。

（六）葡日友好議員連盟議員団との会談

議員団は、ドゥアルテ・アルヴェス葡日友好議連副会長（与党（閣外協力）、共産党）、アントニオ・トパ同会長代理（野党、社会民主党）、アナ・リタ・ベッサ議員（野党、民衆党）と議会内で会談した。

冒頭、アルヴェス副会長から、議員団の訪問に対し歓迎の意が示された。これを機に議員間での友情を育み、五百年に迫る日本とポルトガルの相互交流の一助となれば光栄であるとの挨拶があった。

馬場理事から、翌十月に総選挙を控える中、こうした機会を作ってくれたことに感謝するとともに、議会間交流としては二〇一〇年に今回同様、参議院議院運営委員長一行が公式訪問しているが、今回の会談を通じ、両国の友好な関係を更に強化したいとの挨拶があった。

トパ会長代理から、娘が東京の建築事務所に十一年勤めており、偶然にも明日、そのスタッフの一員としてこちらの入札に参加するため帰国する。こうした個人的な結び付きが両国の関係強化につながるとの発言があった。

会談に先立ち、議場等の施設を視察した。

（七）ドゥアルテ・コルデイロ首相担当兼国会担当副大臣との会談

冒頭、コルデイロ副大臣から、議員団の訪問に対し歓迎の意が示された。二〇一五年より第二党の社会党が少数政党の閣外協力を得て連立政権を発足させ、この四年間安定的な運営を行ってきた。私の任務でもあるが、政府と議会の間でどのように政策調整を行ってきたのかとの点を中心に話をしたいとの挨拶があった。

馬場理事から、同副大臣は日本では内閣官房副長官に当たると思うので、その立場から見た政府と議会の関係について話を伺いたいとの挨拶があった。

議員団から、各政党が独自の政策を持っている中、連立政権ではどのように調整してきたのかとの質問に対し、同副大臣は、当初は不安視する声もあったが、

所得政策、年金制度など意見が一致する分野は合理的かつ迅速に取り組んできたことに加え、予算、重要法案等は事前に合意を取り付ける一方、そうでない法案は各党の自由を認めるなどバランス良く対応してきたとの回答があった。

また、議員団から、連立政権への安心感を得るためには国民へのアピールも必要と考えるが、国民に対してどのように説明してきたのかとの質問に対し、同副大臣から、連立政権を組むに当たり、果たすべき義務を規律として定め、各党が署名し、これをもって国民に対し安定感をアピールしてきたとの回答があった。

四、終わりに

今回の訪問では、英日議員連盟に所属する上院及び下院議員、葡日友好議員連盟に所属する議員などとの会談を通じ、国政の重要課題等について相互の理解を深めることができた。

そのうち英国においては、到着した翌日に同議会が再開し審議を行うなど、ＥＵ離脱をめぐる政治情勢が緊迫し、状況が日々変わる中、特に英日議連の下院議員との会談においては、党内でも影響力のある与野党議員が一堂に会し、率直かつ核心に迫る意見交換ができたことは大きな収穫であった。

さらに、訪問したロンドン、リスボンの両都市において日本企業で活躍される邦人の方々との意見交換を通じて、現地での事業展開の労苦など、各国の事情や現地で活動していく上での課題や要望等について認識を新たにすることができた。

各国への訪問に際しては、鶴岡公二在英国大使、新美潤在ポルトガル大使を始め、在外公館員等多くの方々の協力を得た。特に、台風第十五号の影響による帰国日程変更のため、急きょ対応いただいた河原節子在フランクフルト総領事、在外公館の方々には個別に御礼を申し上げたい。

報告を終えるに際し、各国の議会及び訪問機関の関係者、在留邦人、在外公館の方々に心より御礼を申し上げたい。